

TOPICS

- ①先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#3
公務員志望学生への支援の取組について
— Googleクラスルームを活用した伴走型実践 —
- ②先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#4
「チームワークとリーダーシップ」における看護栄養学部の学生の学び
- ③英語科目におけるeTextbook導入の現状と課題 —モニター調査報告—
- ④卒業生の声から見えてくる「淑徳らしさ」とは？
— スチューデントサクセス研究の取り組み —

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介 #3

公務員志望学生への支援の取組について

— Googleクラスルームを活用した伴走型実践 —

田村 美由紀、前島 由美子、宮澤 健一郎

教育学部こども教育学科の幼児教育コースでは、保育士・幼稚園教諭・福祉職としての公務員志望者を対象とした継続的な支援を行っています。公務員試験は情報収集の早さや準備の質が合否に大きく影響する一方で、試験制度や選考方法が年々変化しています。そのため、できるだけ早い段階から伴走する形での支援体制を整えています。

現在、「公務員になりたい！」というGoogleクラスルームを設置し、情報共有や個別指導を組み合わせた支援を実施しています。教員・保育士養成支援センターやキャリア支援室の方々と教員が連携し、学生のニーズに合わせた対応のための環境を備えています。クラスルームの開設時期は、前年度の1月で、3年次の最終授業週前後に設定しています。この時期から、公務員採用に関する情報公開が少しずつ始まります。学生が「まだ先の話」と感じている段階でも、実際にはエントリー準備が始まっていることがあるため、情報提供を前倒しすることを意識しています。

Googleクラスルームでは、まず公務員試験全体の流れを整理した情報を提供し、試験種別、エントリーから最終合格までのプロセス、自治体ごとの違いなどを丁寧に説明しています。公務員試験は一

律の仕組みではなく、自治体ごとに募集職種や試験内容が異なるため、学生は最初の段階で戸惑うことが少なくありません。そのため、「まず全体像をつかむ」ことを重視しています。そして具体的な支援内容としては、Webエントリー方法の説明、エントリーシートの添削、筆記試験対策、論作文指導、面接練習などを行っています。特にWebエントリーについては、アカウント作成からサポートしています。学生の中には、手続きそのものが複雑であることに抵抗を感じ、受験をあきらめてしまうことがあります。そのため初期段階のサポートは特に重視しており、手厚い支援を心掛けています。

試験対策としては、関連書籍や過去問題集の情報提供、学習方法についてのアドバイスも行っています。ただし近年は、筆記試験を廃止または縮小する自治体が増えています。SPI試験の導入、論作文や人物評価のみの試験方式、複数回面接を実施する自治体など、選考方法は多様化しています。また、動画投稿型面接やオンライン面接（夜間実施を含む）を取り入れる自治体も増えており、学生が実習や授業と両立しやすい環境が整いつつあります。こうした動向を踏まえ、言語化力や自己

理解を深める指導にも力を入れています。

さらに志望動機や自己PRでは、単に「公務員として地域に貢献したい」といった抽象的な表現ではなく、具体的な経験に基づいたとなるように指導しています。「その学生ならではのエピソードが語られているか」「経験と志望自治体の施策が結びついているか」「読み手に具体的な人物像が伝わるか」といった観点から丁寧に添削しています。文章の表現を整えるだけでなく、学生自身がこれまでの学びや実習経験を振り返り、自分の強みや価値観を再確認する機会にもなっています。

この添削指導は、教員だけでなく、養成支援センターやキャリア支援室の方々にもご協力をいただいております。また、面接指導においては複数の教員に加わっていただき、多面的なフィードバックを行っています。学生は自分の課題や希望に応じて指導を受けることができ、複数の視点から見てもらえることが安心感や自信に繋がるという声も聞かれます。部署を越えた連携が、就職支援の質を高めていると感じています。

参加状況としては、「公務員になりたい！」のGoogleクラスルームには52名、LINEグループには26名が参加しました。LINEの活用は限定的ではありましたが、個別添削や相談につなげる窓口として機能しており、学生が気軽に質問できる環境を整えることの大切さを改めて実感しています。試験日が集中する夏期には、対策講座や相談時間を設け、参加した学生に対してじっくりと時間をかけて指導することができました。今後は、オンライン面談の活用なども含め、より参加しやすい形を検討していきたいと考えています。

実績としては、2月15日現在で23名の合格が確認されています。板橋区、豊島区、所沢市、富士見市をはじめ、東京都内・埼玉県内の各自治体、さらに千葉県、神奈川県、新潟県、富山県など、広い地域で合格の報告が届いています。公務員試験は併願受験が一般的であり、延べ合格数はさらに多くなります。中には四つの自治体から合格をいただいた学生もいます。また、都道府県の福祉職や社会福祉事業団などへの合格報告もあり、進路選択の幅が広がりつつあると感じています。

この取組は、単なる「合格者数の増加」を目的と

するものではありません。学生が自分自身の経験を振り返り、地域社会の中でどのような役割を担いたいかを言葉にしていくプロセスそのものが、重要なキャリア形成の機会であると考えています。エントリーシートの作成や面接練習を通して、学生は自己理解を深め、将来像を具体化していきます。その過程に寄り添うことが、私たち教職員の役割だと感じています。今後も、自治体の試験動向を注視しながら、早期の情報提供と個別支援の両立を図っていきたいと考えています。また、卒業生の受験報告書の充実や、合格者との交流機会の設定など、支援の幅をさらに広げていく予定です。学内の連携を大切にしながら、学生が安心して挑戦できる環境づくりを継続していきたいと思っています。

(教育学部 こども教育学科 教授 田村美由紀、教育学部 教員・保育士養成支援センター 前島由美子、キャリア教育・支援センター 埼玉キャリア支援室 課長補佐 宮澤健一郎)



図：2026年1月に開催したGoogleクラスルーム開設のスタートアップ説明会

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#4

「チームワークとリーダーシップ」における看護栄養学部の学生の学び

坂口 景子

本報告は、淑徳大学高等教育研究開発センター年報第12号、p53-63（2025）掲載の報文『「チームワークとリーダーシップ」における看護栄養学部の学生の学び—質的統合法（KJ法）による分析—』（牧野，他）を基に作成した。以下、「チームワークとリーダーシップにおける学生の学び」の分析結果の概要を示す。

はじめに

2023年4月より、淑徳大学全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）が開講された。淑徳大学ならではの学びの基盤として、「学習力の養成」「思考力の養成」「表現力の養成」「人間力の養成」「社会力の養成」「人間の理解」「社会の理解」「国際の理解」の8項目を挙げている。これからの社会を生き抜くために必要となる基本的な力（知識・技能・態度）として、今、社会で重要視されているスキルに、「コミュニケーション力」と「リーダーシップ力」が挙げられる。他者と共に共通の目標を達成するためには、この2つの力が不可欠であり、全学共通で学ぶS-BASICにおいて、他者と協調・協働して行動することができる資質や他者に方向性を示し、目標を達成するために発揮できる能力を養成するとともに、自ら目的を設定し確実に行動する態度や物事に進んで取り組む姿勢を涵養する、「チームワークとリーダーシップ」（後学期・1単位）という科目が組み込まれている。この授業は、チームを目標達成に導くリーダーシップとは何かを明確にし、適切なリーダーシップを発揮するためにチームメンバーがすべきことを学修することを目的とし、学生アシスタント（以下、LAとする）の進行のもと、ディスカッションや発表などを織り交ぜて、実践的かつ理論的に理解を深めていくという方法を用いている。本学の建学の精神である「利他共生」を原点とした多彩な学びの中で「淑徳人」としての基礎を築き、専門教育科目の学びや学生生活など、さまざまな経験を通して成長する

こと、そして、社会に出てからも学び続ける姿勢を育むことをめざしている。「実学教育」の原点を建学の精神である「利他共生」とし、知識や技術の習得に加え、社会を生き抜くための人間性も培うプログラムを1年次の必修科目として全学科で取り入れている。

授業のスケジュール

第1回目「リーダーシップとは」では、リーダーシップの定義と最小三要素を理解し、それを体験する。第2回目「自己開示とフィードバック」では、どのように自己開示とフィードバックを行えるか、またそれらを通じてどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第3回目「傾聴と質問」では、どのように傾聴と質問を行えるか、またそれらを通じてどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第4回目「合意形成と目標設定」では、どのように合意形成を図ることができるか、またそれらを通じてどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第5回目「自己理解と他者理解」では、どのように自己理解と他者理解を深められるか、またそれらを通じてどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第6回目「ディスカッション」では、どのようにディスカッションを行えるか、またそれらを通じてどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第7回目「ミニプロジェクト」では、具体的にどのような場でどのようにリーダーシップを発揮できそうか検討する。第8回目「学修成果発表」では、この授業で得た学びを日常生活の中で具体的にどのように活用するか検討する。

学生の学び

期末レポートを対象に、学科ごとに質的統合法（KJ法）を用いて分析した。その結果、看護学科は【リーダーシップの定義的理解】【自己理解と他者理解を通じたリーダーシップを発揮しやすいチームワークの理解】【具体的なチームワーク実

践の理解】【リーダーシップの再解釈と授業外に
 広がるチームワーク実践への展望】の4つのシン
 ボルマークが抽出された（図1）。栄養学科は
 【専門職としてのリーダーシップの重要性の理
 解】【実践への意欲】【全員発揮することの重要
 性の理解】【環境づくりの重要性の理解】【リー
 ダーシップを発揮する手法の理解】【リーダ
 ーシップの定義の理解】の6つのシンボルマークが
 抽出された（図2）。これらの結果から、看護学
 科と栄養学科の学生はともに、リーダーシップの
 定義的理解を深めていた。一方で、学科による違
 いもあった。看護学科の学生は、自己理解と他者
 理解を通じたリーダーシップを発揮しやすいチ
 ムワークの理解を深める中で、リーダーシップの
 発揮しやすい環境が生み出されることの意味を示
 していた。栄養学科の学生は、全員発揮すること
 の重要性の理解に至るまでに、関連する知識を可
 能な限り列挙し、知識を整理しながら、核心部分
 の理解を深めていた。

おわりに

本授業は、2026年度も看護学科と栄養学科の
 各教員、LA、株式会社イノベストにより引き続き
 実施される予定となっている。今回明らかとなっ
 た学生の学びをふまえ、将来専門職となる学生の
 多職種連携能力を導き、育むことが必要である。

謝辞

本報告にあたりご指導いただきました、牧野美
 幸先生、田中元基先生、土谷庸先生、岡本あゆみ
 先生、廣岡駿一様に心より御礼申し上げます。

（看護栄養学部栄養学科 講師 坂口景子）

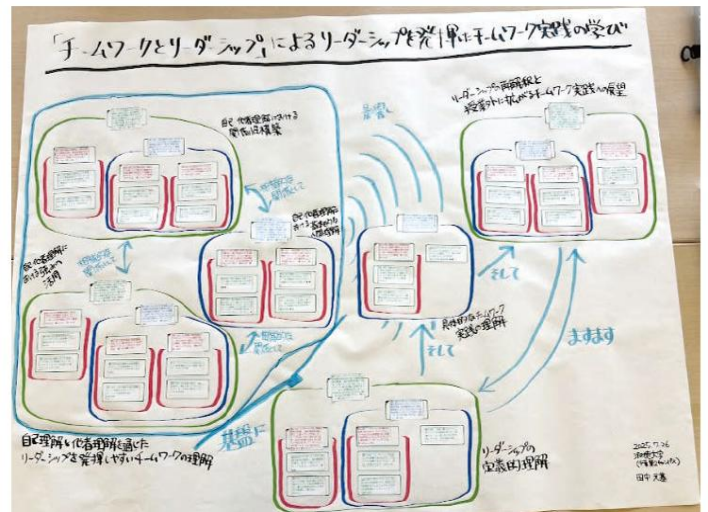


図1：各シンボルマーク間の関係性と配置（看護学科）
 出典：淑徳大学高等教育研究開発センター年報 第12号 2025

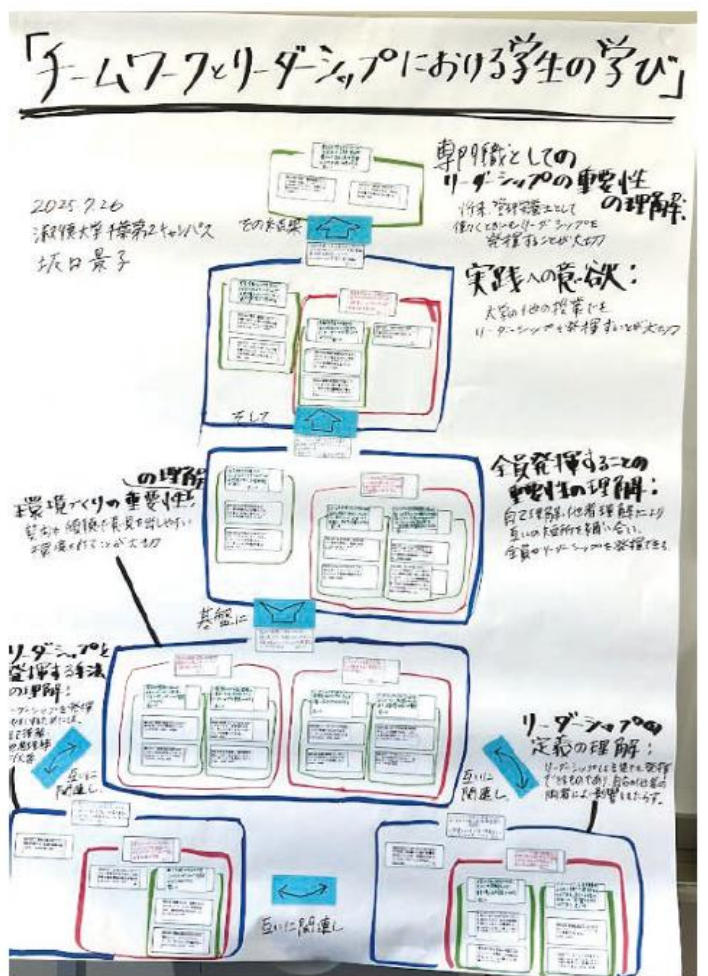


図2：各シンボルマーク間の関係性と配置（栄養学科）
 出典：淑徳大学高等教育研究開発センター年報 第12号 2025

卒業生の声から見えてくる「淑徳らしさ」とは？

— スチューデントサクセス研究の取り組み —

小山 知子

私は2025年度、淑徳大学高等教育研究開発センターに着任し、S-BASIC「社会的・職業的自立Ⅰ・Ⅱ」を担当しています。あわせて、本センターの研究課題である「スチューデントサクセス（学生の成長と成功）」の構造を明らかにする取り組みを進めています。具体的には、卒業生へのインタビュー調査を通して、本学の教育が学生の成長にどのように関わっているのかを探究しています。本ニュースレターでは、現在進行形で実施している調査から見えてきたことをご紹介します。

これまで本学において、卒業生へのアンケートやインタビュー調査は実施されてきました。しかし、一人ひとりにじっくり時間をかけ、「大学時代の経験が今の仕事や生活にどのようにつながり、活かされているのか」というところまでいねいに聴き取る機会は多くありませんでした。卒業生の語りを通して、本学の教育がどのように人生の中で活かされているかを明らかにしたいと考えました。それが本研究の出発点です。

私の専門の一つはキャリア教育です。これまで、「ライフキャリア教育が学生の成長にどのような影響を与えるのか」をテーマに研究を行ってきました。ライフキャリア教育とは、今後10年ほどの人生を見通しながら、卒業後に起こりうるライフイベントにどう向き合いたいか、また人生のさまざまな役割をいつ、どのように引き受けていきたいのかを考え、自分らしい選択を重ねていく力を育む教育です。学生がどのような経験を通して自信を深め、自らの歩みを意味づけていくのかという問いは、今回のスチューデントサクセス研究にもつながっています。この7年ほど、関西大学の杉本英晴先生と共同研究をしてきました。そのご縁から、杉本先生を兼任研究員としてお迎えし、スチューデントサクセスの共同研究を進めています。卒業生へのインタビューを通して、学生がどのような経験を経て成長していくのか、そしてその過程に大学がどのように寄与しているのかを検討しています。

調査の入り口として着目したのが、2年次生対象

S-BASIC「社会的・職業的自立Ⅰ」第7回で実施している「卒業生の職業体験を聴く」です。本授業では、学科ごとに卒業生をお招きし、在学生に向けて大学時代の学びや現在の仕事についてお話いただいています。写真は千葉キャンパスでの授業風景です（5号館201教室にて4クラス合同授業を実施）。



図1：第7回社会的・職業的自立Ⅰ 授業の様子

今回、この第7回に登壇された卒業生の方々の中から17名にお声がけし、インタビュー調査を行うことにしました。授業では限られた時間内でのお話になってしまいますが、研究ではさらに踏み込み、「自分が成長したと感じた経験はどのようなことでしたか？」「それは授業、課外活動、アルバイト、留学など、どのような場面でしたか？」「友人、先生、先輩など、周囲の人はどのようにあなたを支えましたか？」などと丁寧に掘り下げています。

これまでのインタビューから見えてきたのは、学生の成長の背景にある一つの循環です。それは、「挑戦し、失敗し、振り返り、再び挑戦する」というプロセスです。ゼミでの発表がうまくいかなかった経験、立ち上げたサークルの会議で話し合いがまとまらず苦勞した経験、1年次に予想以上に単位を落としてしまった経験…。多くの卒業生が率直に当時、感じたこと、その経験から学んだことを語ります。同時に、「そのとき誰かが自分のことを気にかけてくれた」という言葉も聞かれました。

例えば、「先生がもう一度やってみようと言ってくれた」「何度も面談をしてもらった」。

そうした言葉が、語りの中に繰り返し現れます。失敗を責められるのではなく、親身になって受け止めてもらったという経験。努力の過程を見てもらったという思い。安心して挑戦できる環境があったからこそ、もう一歩踏み出すことができたという声が複数聴かれました。

そこから浮かび上がってくるのは、単なる成功事例ではなく、「人との関わりの積み重ね」です。誰かが自分に時間をかけてくれたという記憶、自分もその思いや期待に応えようとした経験。そうした相互的な関係の中で成長が促されている可能性が見えてきました。本学の教育理念である「利他共生」という言葉は、必ずしも卒業生の口からそのまま語られるわけではありません。しかし、時として誰かに支えてもらいながら前に進んだ経験や周囲との関わりの中で自分を見つめ直した経験を通じて「利他共生」の精神が育まれたのではないかと感じています。

S-BASIC「社会的・職業的自立Ⅱ」第2回で実施した株式会社マイナビのアセスメントツール「MATCH plus」の受検結果によると、社会人基礎力12の能力要素のうち、全体として「状況把握力」「規律性」が高く、「課題解決力」「創造力」が低い傾向が見られました。一方で表現学科は「創造力」、観光経営学科は「計画力」、実践心理学科および教育福祉学科は「状況把握力」が強みとして現れるなど、学科ごとの特色も確認されました。大学時代に培った社会人基礎力が現在の仕事や生活にどのように活かされているのか、また不足していた基礎力はどのような経験をもとに伸ばしていったと感じているか、お話を伺うことで今後の教育支援につなげていきたいと考えています。

社会構造や働き方が大きく変化し、将来の見通しが立てにくい現代社会において、人と支え合いながら挑戦を重ねていく力はますます重要になっています。卒業生の語りを重ねることで、「淑徳らしさ」とは何かを言葉にし、それを育む教育改善や今後の大学づくりへとつなげてまいります。卒業生の一人ひとりの声が、淑徳大学の未来を形作る大切な手がかりになると期待しています。

(高等教育研究開発センター 准教授 小山 知子)



図2：第7回社会的・職業的自立Ⅰ 授業の様子（千葉キャンパス）



図3：第7回社会的・職業的自立Ⅰ 授業の様子（千葉キャンパス）



図4：第7回社会的・職業的自立Ⅰ 授業の様子（東京キャンパス）



図5：第7回社会的・職業的自立Ⅰ 授業の様子（東京キャンパス）

※千葉第二キャンパス（栄養学科、看護学科）、埼玉キャンパス（地域創生学科）は各教室で、こども教育学科は2クラス合同で同授業を実施しました。

本学では2024年度より、教育のデジタルトランスフォーメーション（DX）の一環としてデジタル教科書（eTextbook）を導入いたしました。2025年度からはノートパソコンの必携化も開始され、学内の学習環境は大きく変化しています。本稿では、埼玉キャンパス地域創生学部の一部クラスで実施したeTextbookのモニター調査について報告します。

1. ピアソン社のeTextbookについて

英語科目のeTextbookについては、単に紙の教科書をPDF化したものではなく、音声や動画の再生機能に加え、デジタル上で問題演習が可能であることを要件としました。複数の出版社の教科書を精査した結果、ピアソン社の教科書を採用することに決定しました。ピアソン社のeTextbook（StartUp 1）では、図1のように教科書の見開きページをオンライン上で確認することができます。

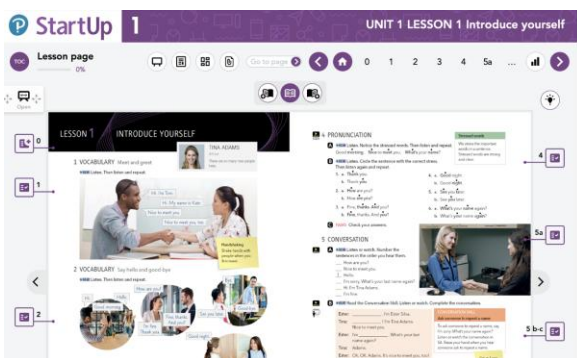


図1. StartUp 1 Unit 1 (Pearson English Connectより)

例えば、右ページ上部の「4 Pronunciation（発音）」をクリックすると、動画を通して発音を確認することができます。教員用ページでは、動画の再生速度を変更したり、英語字幕を表示したりすることが可能です（図2）。



図2. Pronunciation Coach Videoの動画画面 (Pearson English Connectより)

また、学生用のページからも動画や音声の再生速度を変更することができます。さらに、事前・事後学習としてResources（リソース）のページから、音声と動画をまとめて確認することができます（図3）。

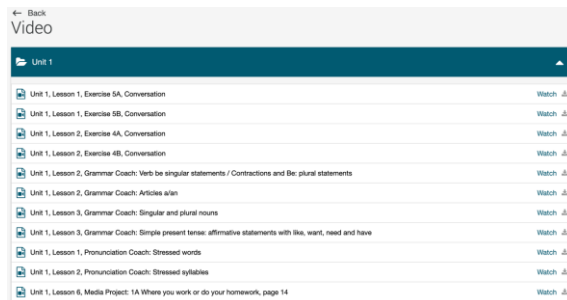


図3. Resources Unit 1の動画の一覧

eTextbookに収録されている練習問題については、ツール機能を活用することで、解答をオンライン上に直接書き込むことが可能です（図4）。

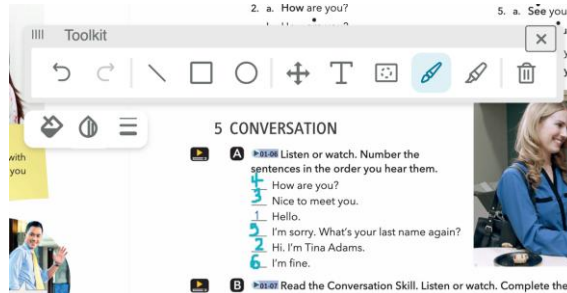


図4. eTextbookへの書き込みの例

このように、学生は各自のノートパソコンを用いて動画や音声を視聴・確認することができ、紙の教科書と同様に問題に取り組み、その解答を書き込むことが可能です。さらに、MyEnglishLab（オンライン学習機能）を通して、授業で学んだことの復習の機会も提供されています。

2. モニター調査の結果

実際にピアソン社のeTextbookを使用したモニター調査では、eTextbookの機能面における評価は、項目によって極めて対照的な結果を示しています。

- 音声教材の利便性：85%の学生が、即座に音声を確認できる点を高く評価しています。

これはデジタル化の最大の恩恵と言えます。

- 学習の継続性と定着度：一方で、語彙の確認や練習問題の取り組みやすさについては、半数以上の学生が否定的な反応を示しました。特に「試験準備（復習）」に関しては、75%の学生が使いにくさを感じており「eTextbookよりも紙の教科書の方が使いやすい」と回答した学生は全体の7割に達しました。

また、本調査において、最も深刻な課題として浮上したのが学内のインターネット環境の不安定さです。eTextbookのデータ容量が大きいことも影響し、通信環境が安定しない状況が見られました。授業参観中には、eTextbookのページが開かない、あるいは表示に過度な時間を要するなど、学生が待機状態になる場面が何度も確認されました。これは単なる時間のロスにとどまらず、学習者の集中力を削ぎ、授業のテンポを著しく阻害する要因となっていました。

担当教員へのインタビューからは、接続状況の悪化により、準備していた授業計画を急遽変更せざるを得ないといった、教員側の心理的・教育的な負担も報告されました。ICTの活用が、かえって授業の質を不安定にするという逆説的な状況が発生しており、インフラ整備がデジタル化の前提条件であることを強く再認識させる結果となりました。

3. 教育的・事務的観点からの考察・結論

eTextbookは多機能であるがゆえに、教員には紙の教科書以上の事前準備や操作への習熟が求められます。今回の調査では、一定のICTスキルを有する教員であっても操作に苦慮する場面が見られました。また、学生のノートパソコンの仕様が一律でないことから、トラブル対応のために教員側にも相応のコンピュータスキルが必要とされました。デジタル化は教員の負担軽減を目的とする側面もあるが、現状ではむしろ高度な授業運営能力を求めている状況がうかがえます。

さらに、ページをめくる、書き込むといった身体的感覚を伴う学習の方が、記憶に定着しやすいとの意見が担当教員から挙がりました。

デジタル画面上でのスクロールやリンクによるページ移動は一覧性に欠けるため、学習内容の全体像を把握しにくくしている可能性があります。また、eTextbookには書き込み機能が備わっているものの、主にタッチ패드やマウス操作による入力が必要であり、紙の教科書のように自由に書き込んだり付箋を貼ったりする感覚で利用することは容易ではありませんでした。さらに、必要な箇所を即座に確認できるといった操作性も十分とは言えず、これらの点が復習や試験対策のしにくさにつながった可能性があります。

以上の調査結果を踏まえると、本学における現時点での最適な運用方針は、紙の教科書を基軸としつつ、オンライン学習を補助的に活用するハイブリッド型であると結論づけられます。

謝辞

本モニター調査にご協力いただいた学生の皆様、授業をご担当いただいた重枝先生、ならびにピアソン社の三田村様と乾様に心より感謝申し上げます。

(高等教育研究開発センター 助教 今村有里)

高等研センター年報について



淑徳大学高等教育研究開発センターでは、2025年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第12号」を発刊いたしました。

現在、年報のHP掲載も実施しております。ご興味のある方は淑徳大学 高等教育研究開発センターHPにてご確認ください。

淑徳大学

高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2025 第2号

発行日：2026年3月31日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：03-5918-8948 FAX：03-5918-8968

E-mail：kaiatsu@soc.shukutoku.ac.jp